

刺繍と壁画の里



白沙は昔から刺繍の里として有名だった様だ。文革時代に一度すたれてしまったが、復活を目指して後継者養成をしている学校を見学した。商店のあるとおりから路地に入ると大きな屋敷が並んでいるその一角にその学校がある。右の写真がその門

であるが、トンパ文字と英文の看板が掛けてあった。門を入ると中庭が在ってその前後に工房と展示室がある。工房の中では数人の少女たちが熱心に刺繍をしていた。



左の家が展示室になっていて、生徒の作品が即売されている。大きく見事な作品が数多く展示されていた。写真の少女はまだ初心者らしくパターンを見ながら丁寧に作業をしていた。ここはこの村の観光の目玉らしい。中庭には休憩してお茶を飲める準備がされていた。気付いたらどうか屋根の上には猫の魔除けが鎮座している。



この専門学校には観光に来る人が多いのだろう。大きな地図の壁画があった。「中国南方北方絲綢（シルク）之道」とあり主要な駅が描かれている。もう一つは茶馬古道の案内板で古道のルートが描かれていた。日本では南方シルクロードも茶馬古道もあまり馴染みのある言葉ではなかったが、これではっきりと存在を認識することが出来た。



村内の見学を終えて戻る途中で広い囲みの屋敷を見つけた。看板をみると木氏の博物館の様だ。日本に帰ってから、調べてみたら、その昔「文昌宮」と呼ばれていた建物で学校として建設された。現在は木氏の時代の歴史や文化を知ることの出来る博物館になっているとあった。

もう少し早く見付けたら見学してみたかった所である。手前の壁にはトンパ文字が描かれている。

白沙壁画

そして必ずその写真が載っている。木氏が土司になると積極的に周囲の先進文化を取り入れて楼閣を建造し、村の中に壁画を造ったとされている。古い建造物が失われて大分少なくなっただけで、それでも重要なものは残されていて、中国の国家重要文物



（国宝）に指定されているものも数点あるとの記載がある。その中心になっているのが大宝積寺、琉璃殿、大覚宮、大定河で前三つが明代、大定河は清代の制作とある。残念ながら今回拝見する機会がなかった。

屋敷の多い地区の壁に左のトンパ文字の壁画があったが、これはそんなに古いものではなさそうだ。次ページに参考資料として、ネットの案内書から転載した写真を載せた。



※ ここまで大理周辺から麗江白沙古鎮までの古道と宿場町を訪れた。ここから先は厳しい怒江峡谷の古道になる。今回はここまでにして、茶葉の生産地、西双版纳に向かうことにした。



左が大宝積宮の琉璃殿と思われるが琉璃色の見事な楼閣で、「白沙壁画の額が掲げられている。ここには12副の壁画があって、最大のもは高さ2m、巾4.5mの大きいもので、宗教の融合を図って仏教、道教、チベット仏教の様式を納西族、漢族、チベット族の画家が描いたものであり、民族の宗教的な特徴が出ている貴重なものと言われている。また宗教と世俗の融合から当時の労働や生活の状況が同時に描かれているらしい。

実物を見て歩けば、往時の社会の様相、木氏の目指したものが解るかもしれない。



資料にはトンパ文字の壁画も紹介されている。私が見たものよりかなり大きい。何が書かれてあるのか興味があるが、解説されていないので解らない。

下の写真はトンパ文字の読み方の一例が載っていた記事の抜粋である。

これだけでは理解できないが複雑な表現が組み合わせでされているようだ。



右は白沙村で私が撮ったトンパ文字だがこれだけの情報ではとてもこのクイズは解けそうにない。